

## 17th-Century Phoneticians' Classification and Description of [ʃ], [ʒ], [tʃ] and [dʒ]

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊田, 和典 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1094">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1094</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 17世紀の音声学者の [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の分類と記述

17th-Century Phoneticians' Classification and Description of [ʃ], [ʒ], [tʃ] and [dʒ]

熊田和典

KUMADA, Kazunori

## 1. 序論

17世紀の英国では合理主義の影響の下、E. J. Dobsonが“phoneticians”（「音声学者」）と呼ぶほど言語音の分析が優れた文法家が現われた（1985: 1, 199）。彼らの言語音に対する考え方は今日の音声学の基準からすると未熟だったものの、今日の音声学への先駆者として役割は大きいと考えられる。前世紀の文法家、綴り字改革者は当時の乱れた英語の綴り字を嘆き、綴り字改革を実現するための前段階として当時の言語音を分析したが、彼らの分析はPriscianus CaesariensisやAelius Donatusなどのギリシア語・ラテン語文法家の伝統的な記述を踏襲するにとどまったものが多かった。17世紀の文法家、綴り字改革者の中には言語音の理論的な考察と体系化に関心を抱き、個々の言語の観察よりも普遍的な音標文字の考案に目を向けたものが登場した。彼らは古典語文法家の伝統的な枠組みから脱して、彼ら独自の言語音に対する考えを基に新たな音声的枠組みを構築しようと試みた（Robins 1997: 135）。この彼らの科学的考察により言語音の分類ならびに調音に関する分析は精緻になり、概して現在の音声学的な分析に近づいたと言える。その彼らの言語音の分析の中

で、本稿は彼らの無声と有声硬口蓋歯茎摩擦音 [ʃ], [ʒ] と無声と有声硬口蓋歯茎破擦音 [tʃ], [dʒ] の分類と記述を取り上げ、具体的な資料を基に彼らの硬口蓋歯茎音の捉え方を考察したい。<sup>1</sup>

しかしながら、他の大半の子音とは異なり、これらの硬口蓋歯茎音は古典ギリシア語、古典ラテン語の音韻体系には存在しないため、古典語期の文法家の言語音の分類には見受けられない。<sup>2</sup> 例えば、ラテン語文法家 Priscianusは、*Institutiones grammaticae*（Keil 1855: 2, 9）にて、言語音をまずvocales（母音）と consonantes（子音）に分け、さらに consonantesを semivocales（半母音）（*f, l, m, n, r, s, x*）と mutae（黙音）（*b, c, d, g, h, k, p, q, t*）に分けているが、この分類に硬口蓋歯茎音は見られないのである。したがって、初期近代英語期の音声学者が、古典語文法家の分析を拠り所とせず、彼ら自身の分析を頼りに、彼らが構築する言語音の枠組みにこれらの硬口蓋歯茎音をいかに組み入れるのか、また、その言語音の調音をいかに分析するのか、この彼らの企てを考察することは興味深い。この音の分類や分析において彼ら自身の観察に基づく考察力が試されることとなる。

この4硬口蓋歯茎音を考察するにあたって、

キーワード：17世紀、ʃ, ʒ, tʃ, dʒ, 後部歯茎摩擦音、後部歯茎破擦音  
Key words : 17th century, ʃ, ʒ, tʃ, dʒ, postalveolar fricative, postalveolar affricate

初期近代英語期においては /ʃ/, /tʃ/, /dʒ/ は既に音素として存在していたのに対して、 /ʒ/ はその当時新たに生まれた音素であるということ considering おこななければならない。 /ʃ/ は ModE. (近代英語) *ship* (OE. (古英語) *scip*), *wash* (*wascan*), *fish* (*fisc*) などの語に見られる古英語期に起きた [sk] の口蓋化の産物かあるいは *champagne*, *chevalier*, *machine* などの古フランス語などからの借用語に存在していた (Horn-Lehnert 1954: 2, 812-17, 819-21)。 /tʃ/ は古英語期に起きた [k] (ModE. *chaff*, *child*, *chin*), [kk] (ModE. *flitch* (OE. *flicce*), *witch* (*wicce*), *wretch* (*wræcca*)) の口蓋化の産物であるかあるいは ModE. *chair*, *chamber*, *chance* などの古フランス語からの借用語に存在していた (Horn-Lehnert 1954: 2, 816-21)。 /dʒ/ は古英語期に起きた [gg] (ModE. *bridge* (ME. *brigge*), *edge* (*egge*), *midge* (*migge*)), [ŋ] に後続する [g] (ModE. *singe*, *swinge*, *hinge*) の口蓋化の産物であるかあるいは、 ModE. *gem*, *gentle*, *judge*, *just* のようなフランス語からの借用語に存在していた (Horn-Lehnert 1954: 2, 821-22)。 /ʒ/ は近代英語期に *vision*, *occasion*, *confusion* のように ME. [zj] の同化の結果生まれたかあるいは、 *garage*, *prestige*, *rouge* などの当時フランス語から借用されたばかりの語や外来語において /dʒ/ とともに併存していた (Horn-Lehnert 1954: 2, 822)。また、この ME. [zj] > [ʒ] とともに *nation*, *passion*, *ancient* などの語に見られる ME. [sj] > [ʃ] が 17 世紀から文法家に記述に見られること (Dobson 1968: 2, 957-58; Horn-Lehnert 1954: 2, 1080-94)、さらに、 *tube*, *Christianity*, *mature* などの語に見られる ME. [tj] > [tʃ], *dew*, *soldier*, *endure* などの語に見られる [dj] > [dʒ] が 17 世紀末から文

法家に記述に見られること (Dobson 1968: 2, 959-60; Horn-Lehnert 1954: 2, 1094-1103) も考慮しておこななければならないであろう。現在でも発音に慎重な話者は *statue*, *residue*, *issue*, *seizure* などの語では推移以前の音を使うものもある (Cruttenden 2014: 230)。

この領域における先行研究には、J. A. Kemp が *John Wallis Grammar of the English Language* (1972) において、16, 17 世紀の言語音の扱われ方を考察した小論があるが、この論考の分析は John Wallis (1616-1703) の分析に重点を置いたもので、当時の 4 つの硬口蓋歯茎音の包括的な分析としては十分とは言えない (1972: xxxiv-lxvi)。初期近代英語の音を包括的に扱った Dobson (1985) と W. Horn-M. Lehnert (1954) 等によるこの両音に関する研究は優れたものであるが、両者ともに当時の音そのものの分析が研究の主目的である。本稿では、硬口蓋歯茎音が当時どのように分類されて、その調音が記述されているのかに焦点を当てて考察し、この硬口蓋歯茎音に対する当時の考え方を浮き彫りにしたい。

## 2. 現在の音声学の [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の調音

今日の音声学において、調音点の観点から [ʃ], [ʒ] と [tʃ], [dʒ] は硬口蓋歯茎音 (palato-alveolar) あるいは後部歯茎音 (post-alveolar)、調音法の観点から [ʃ], [ʒ] は摩擦音、[tʃ], [dʒ] は破擦音に分類されている。

まず英語の /ʃ/, /ʒ/ の調音は Cruttenden によると「軟口蓋がもち上げられ鼻腔共鳴器が遮断されて、舌尖と舌縁は歯茎に軽く接触し、同時に前舌面が硬口蓋の方に持ち上げられて、舌の側面が上の両側の歯と接触する。」 (“The

soft palate being raised and the nasal resonator shut off, the tip and blade of the tongue make a light contact with the alveolar ridge, the front of the tongue being raised at the same time in the direction of the hard palate and the side rims of the tongue being in contact with the upper side teeth.”) と説明されている。空気の流出は /s/, /z/ に比べ拡散的で、摩擦は /s/, /z/ が舌と歯茎の間で生じるのに対し、/ʃ/ と /ʒ/ は、舌と、/s/, /z/ よりも広範囲な口蓋の部分の間で生じる。調音は /s/, /z/ より弛緩し、気流が放出する舌の溝の形状は /s/, /z/ よりも後部にできる。/ʃ/ と /ʒ/ が円唇を伴うかどうかは隣接母音によるが、すべての位置でわずかな円唇化がみられる話者もいる (Cruttenden 2014: 204-05)。

語中においては /ʃ/, /ʒ/ と /s/, /z/ + /i/ または /j/ の交替が、ModE. *issue, sexual, casual, asure* など /u:/, /ʊə/ の前、*ratio, appreciate, negotiate* など他の母音の前などで起こる。特にイギリスの上流階級が使う CGB (Conspicuous General British) では、/s/, /z/ + /i/ または /j/ が通常用いられる (Cruttenden 2014: 205)。

英語の /tʃ/, /dʒ/ は、気流が「舌尖、舌端、舌縁と上の歯茎と両側の歯でつくられる閉鎖」(“a closure made between the tip, blade and rims of the tongue and the upper alveolar ridge and side teeth”) によって遮断されると同時に、前舌が硬口蓋の方へ持ち上げられた後、閉鎖の開放がゆっくりとなされ、「舌端 / 前舌と歯茎 / 硬口蓋前部の間で」(“between the blade/front of the tongue and the alveolar/front palatal section of the roof of the mouth”) 摩擦が生じてつくられる。舌の構えは隣接音、特に後続母音の舌の構えによる。発音に慎重な話者やイギリスの上流階級が使

う CGB では、*gesture, tune, educate, dew* など /tʃ/, /dʒ/ が用いられるところに /tj/, /dj/ が用いられることがある (Cruttenden 2014: 189-90)。

### 3. 16世紀の [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の分類と記述

16世紀から世に現れた英国の綴り字改革者や文法家の言語音に対するアプローチは依然として古典期の文法家の影響を色濃く受け、彼らの言語音の記述は概して副次的で、断片的なものが多く見受けられる。例えば、Richard Mulcaster (c. 1531-1611) が *The First Part of the Elementarie* (1582) において提示している英語の音の分類は、まず「単一の文字」(“single letter”) である母音 (*a, e, i, o, u*) と子音—mutes (黙音) (*b, c, d, g, k, p, q, t*) と half vowels (半母音) (*f, l, m, n, r, s, x, z*) 一から始まり、次に、母音と子音両方の性質を持つ *i, v, w, y*, aspiration (気音) (*h*) が続き、最後に、complements (補完的な音) と名づけられた「子音連結群」(“combination of consonants”) で終わる。この complements には、*thwak* [ModE. *thwack*] の *thw*, *shrink* の *shr*, *whistle* の *stl* などの子音連結群と気音 *h* を伴った *ch, gh, ph, ch, sh, th, wh* から成ると説明されている (110-24)。このような当時よく見受けられる文字と音声を混同した Mulcaster の分類 (Dobson 1985: 1, 123) では、/tʃ/ を表している *ch*, /ʃ/ を表している *sh* はともに単音ではなく気音を伴った子音結合群と解釈され、mutes と half vowels の分類の枠外に置かれている。/dʒ/ については、*Iak* (ModE. *Jack*), *Iames* (*James*) などの語に使われる子音 *i* の音価として (115)、さらに、*g* の音の説明の中で、/g/ を表す「強音の G」(“G,

strong”) に対して「弱音のG」（“G, weak”）として紹介されている（120）。/z/については、zの音の説明において、*azur* (ModE. *azure*), *treasur* (ModE. *treasure*) などの外国語の借用語に見受けられると説明されている（223）。

Alexander Gill (1565-1635) が *Logonomia anglica* (2版 1621) を書いたのは17世紀だが、世代から考えれば16世紀の人と考えてもよからう。彼はMulcasterのように /ʃ/, /tʃ/ を気音を伴った子音結合と捉えていない。彼は英語の /ʃ/ を「単音」（“simplex...sonus”）と捉え、その音価をG. (ドイツ語) *sch*, ヘブライ文字 ש [ʃ] と同音とみなしている（2, 10）。<sup>3</sup> 一方、/tʃ/, /dʒ/については、両硬口蓋歯茎破擦音を「二重子音」（“duplices consonantes”）と捉え、その音価をそれぞれ *t + sh*, *d + sh* と表しているが、*d + sh* の *sh* については *z* にほぼ変化していると補足している（10-11）。この /tʃ/ を表す表記 *t + sh* の *sh* は /ʃ/ の音価と想定されるが、/dʒ/ を表す *d + sh* については *sh* と表記したままでは /z/ の音価を表せないため、*sh* がほぼ *z* に近いと説明する必要があったと考えられる（Dobson 1985: 1, 144）。そもそもGillが考案した英語の音の分析に基づくアルファベット（11-13）には /z/ を表す文字が見受けられないため、*sh* を *z* に近い音価としか表現する術がなかったのであろう。Gillは彼独自の言語音の分類は行っていない。

Thomas Smith (1513-77) は *De recta et emendate linguae anglicae scriptione, dialogus* (1568) において伝統的な分類を踏襲している。彼は /tʃ/, /dʒ/ の関係が /k/, /g/ の関係と同じだと説いているが、この一節は、無声 / 有声を示す用語を用いてはいないものの、無声 / 有声を示唆している（366）。<sup>4</sup>

当時としては卓越した音声の知識を持ち、英語の音を最初に体系的に分析したJohn Hart (d. 1574) が伝統的な言語音の枠組みを取りながらも、基本的な英語の単子音の体系に /ʃ/, /tʃ/, /dʒ/ を組み入れていることは着目すべきことである。彼は *An Orthographie* (1569: 36a-40b, 41b-42b, 67a) にて、子音を4つの範疇、つまり（1）「息の閉鎖でつくられる」（“made with a stopping breath”）子音 (*b, p, d, t, g, k, dʒ, tʃ*) (67a)、（2）「継続して均一した息を有する」（“have a continual uniform breath”）子音 (*ð, þ, v, f, z, s*) (59a)、（3）liquids (流音) あるいはsemivocals (半母音) (*l, m, n, r, syllabic l*) (38b)、（4）breaths (気音) (*f, h*) に分類している。このように、/tʃ/, /dʒ/ は単音として適切に分析され、その調音が閉鎖の過程から始まるため閉鎖音に分類されているが、/ʃ/ は気音としか解釈されてない。/z/ は英語では使われていないが、フランス語では使われていると指摘している（38b, 58b）。

彼は /ʃ/, /tʃ/, /dʒ/ の調音を適切に記述しているだけでなく、この2子音を無声/有聲の基準で弁別できている。<sup>5</sup> 彼の /ʃ/ の調音は、歯茎音 /z/, /s/ との比較によって適切に記述されている。「この息のシューという音 (hushing) /ʃ/ は、舌を口蓋から離して、上の歯茎あるいは上歯の内側へ引きこみ、両歯だけによってつくられる。これについては両歯を接近させて息を激しく押し出すか、あるいは、上唇か下唇をかみ、息を両歯から押し出せば感じとれるだろう。このようにしてこの息が完全につくりだされるのである。そうすることによって舌が口蓋に接触しないで /z/ と /s/ がつくられることはあり得ないことがわかるであろう。」（“the hushing of this breath /ʃ/ is made

thorow the teeth only and taking of the tongue from the palet, and drawing it inward to the vpper gummes or teeth: which you may perceyue by closing your teeth together, and so thrusting forth of your breath harde: or by biting vnder or vpper lip, and thrusting your breath thorowe your teeth, and so this breath is perfitye made. By which doings you maye finde that the z nor s, can not be made but by touching of the tongue to the palet.”) (38b)。

/dʒ/と/tʃ/の記述では、両音はHartの分類において閉鎖音の範疇に属しているため、閉鎖音の調音の過程、特に閉鎖、開放の過程が適切に描かれている：「このふたつの対の音 [dʒ/, /tʃ/] には、最初の対の音 [b/, /p/] と同様に、息のある停止を伴う。それ故に、調音器官が離れる、つまり両唇が離れる際に、あるいは舌が歯から離れる際に、その分だけ激しく息が押し出される。/dʒ/と/tʃ/の場合も、舌を口蓋と前歯に軽くあてて息が止まると、同様になる」 (“which two last pairs [dʒ/, /tʃ/] have a certain stay of the breath like as had the first pair [b/, /p/], which causeth it at the separating of the parts, to wit of the lips, and of the tongue from the teeth, to be the harder thrust forth. The like of dʒ and tʃ, by putting the tongue to the palate and fore-teeth softly, so as the breath be stayed”) (59a)。

/dʒ/は有声音を示す “inward” な音、/ʃ/と/tʃ/は無声音を示す “breathed” な音と説明されている (42b, 59b)。/ʒ/は/ʃ/の “felowe (ModE. fellow)” と紹介されていることから有声音と解釈してよからう (38b)。

このように、16世紀は依然として古典語の音声観の影響を受けながらも、Hartは/ʒ/を除いた3硬口蓋歯茎音を適切に単音と捉えて、

彼独自の単音の子音の体系に組み入れている。その調音の記述も当時の基準から判断すると群を抜いて詳細で精緻であった。特に、[tʃ], [dʒ] を閉鎖音と捉えながらも、その調音における閉鎖と開放の過程を適切に記述している。

#### 4. 17世紀の言語音の体系化を目指した音声学者の [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の分類と記述

17世紀においても依然として [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] を伝統的に捉える者も見受けられるが、その中で、言語の科学的考察を試みて言語音の体系化を目指した学者がこの4硬口蓋歯茎音をどのように捉えているのか、分析して論じることとする。

##### 4.1 John Wallisの [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の分類と記述

John Wallisは*Grammatica linguae anglicanae* (1st ed. 1653; 6th ed. 1765) <sup>6</sup>において、[ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] を彼の考案した言語音の単子音の体系に組み入れずに、「複合的な文字 [音]」 (“Literae Compositae”) と捉えている。「複合的な文字 [音]」は *ai, ei, ay, ey, au, eu, aw, ew* などの第二要素が子音 *y, w* である二重母音と子音連結群から成る。[ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] を子音連結群と捉えたWallisは、その音価をそれぞれ *sy, zy, ty, dy* と記し、その例としてそれぞれ *syáme* (ModE. *shame*), *syâmbre* (F. [フランス語] *chamber*), *syâm* (G. *scham*); *zye* (F. *je*), *a-zye* (F. *age*); *ort-yard* (ModE. *orchard*), *rit-yes* (ModE. *riches*); *dyar* (ModE. *jar*), *dyoy* (ModE. *joy*) を挙げている (36-39)。[ʒ] に対して彼が挙げた例はフランス語だけである。Wallisの説明通りに解釈

すれば、*sy, zy, ty, dy*の音価は、その *y* が *ay, ey* などの第二要素 *y* であることから、それぞれ [sj], [zj], [tj], [dj] と推定される。

Wallisはこの4硬口蓋歯茎音を子音連結群と捉えているため、彼が通常単音に対して行う調音の記述をこの4子音には行っていない。子音連結群を構成する各子音の発音がわかれば子音連結群自体の発音もおのずとわかると考えたからである。彼はその代わり他の言語音と比較することによって音価を示している。[j] はF. *ch*, G. *sch*, ヘブライ文字 *shin*, アラブ文字 *shin*, 母音の前のW. (ウエールズ語) *si* と同音、[ɟ] は上述した語にあるF. *j*, F. *g*, Pers. (ペルシャ語) *zye* と同音、[tʃ] は母音字 *e, i*の前のIt. (イタリア語) *c*, Pers. *che* と同音、[dʒ] はアラブ文字 *gim*, It. *gi* と同音と述べている (37-39)。この比較から判断すると、Kemp (1972: lx) も指摘しているように、これらの硬口蓋歯茎音をWallisが言う通り [sj], [zj], [tj], [dj] と判断し難い。

しかしながら、Wallisはこの4硬口蓋歯茎音の音価を自信を持ってこのように判断していると考えて間違いはない。4版以降では、ModE. *changer* の音価は他の者が主張している *tsyandsyer* ではなく *tyan-dyer* だと明言した後で、読者に自分の耳で聞いて音価を判断するように促している。彼の説明によれば、ModE. *yew* を *d, t, s, z* に後置すると、*dyew, tyew, syew, zyew* の音価、つまりModE. *Jew, chew, shew*, Fr. *jeu* と同音になるという (Kemp 1972: lx, 38-39)。Wallisの [sj], [zj], [tj], [dj] については後述する。

#### 4.2 John Wilkinsの [j], [ɟ], [tʃ], [dʒ] の分類と記述

John Wilkins (1614-72) は *An Essay towards*

*a Real Character, and a Philosophical Language* (1668) において [j], [ɟ] をそれぞれ音声記号 *Sh* と *Zh* で表し、その音価について、この両音は一文字で綴られていない (F. *Jean*) が、単音 (“distinct and simple letters”) であると説いている。[ɟ] の例としてF. *Jean* (F. *Jean*) を挙げている (369)。

Wilkinsが3部10章3節において行った言語音の単音の分類 (360-62) では、まず言語音はapert (開いた音) (主に現在の音声学でいう母音と半母音) とintercepted (閉じた音) (子音の大部分) に二分され、さらにこの二範疇はleßer (程度の小さい音) とgreater (程度の大きい音) に二分される。interceptedのgreaterに属す音は、閉鎖の度合いが大きい「息を伴わない」 (“non-spiritous or breathless”) (*B* [b], *P* [p]; *D* [d], *T* [t]; *G* [g], *K* [k]) 音である。それに対して、leßerの範疇に属する音は閉鎖の度合いが小さい「息を伴う」 (“spiritous and breathed”) 音で、まずlabial (唇音) (*V* [v], *F* [f]; *M* [m], *HM* [m̥]) とlingual (舌音) (*Dh* [ð], *Th* [θ]; *L* [l], *HL* [l̥]; *R* [r], *HR* [r̥]; *Z* [z], *S* [s]; *Zh* [ɟ], *Sh* [ʃ]; *N* [n], *HN* [n̥]; *Gh* [ɣ], *Ch* [χ]; *Ng* [ŋ], *Ngh* [ŋ̥]) に二分される。次にlabialは口音 (*V, F*) と鼻音 (*M, HM*) に二分されるのに対し、lingualは舌尖で調音される音と舌の根元あるいは真ん中で調音される音に二分された後、それぞれ口音と鼻音に分類される。この舌尖で調音される音には口音 *Dh, Th; L, HL; R, HR; Z, S; Zh, Sh*と鼻音 *N, HN*、舌の根元あるいは真ん中で調音される音は口音 *Gh, Ch*と鼻音 *Ng, Ngh*から成る。最終的に、舌尖で調音される口音は、(1) appulse (近接) による *Dh, Th* (舌尖が歯先に近接); *L, HL* (舌尖が口蓋の最前方部に近接)、(2) trepidation (振

動)による*R, HR*, (3) 息のpercolation (浸透) による*Z, S; Zh, Sh*に分かれる。(3) では*Z, S*を“subtle”(「か細い音」)、*Zh, Sh*を“dense”(「厚みのある音」)と特徴づけ、両者を区別している。この区別は、Wilkinsが3部10章2節において提示した言語音の分類においてもなされている(358)。したがって、Wilkinsの分類において、[ʒ], [f]を表す*Zh, Sh*は閉鎖の度合いの少ないlingual(舌音)の中で、息のpercolationによって舌先で調音される「厚みのある」(“dense”)口音とみなされている。*Zh*には有声音を示す“sonorous,” *Sh*には無声音を示す“mute”という彼独自の用語が充てられている(361, 369, 379)。

[f], [ʒ]と[s], [z]の調音の記述においても、Wilkinsは4子音がすべて「舌先と歯の根元の間での息のpercolation」(“Percolation of the breath; between the top of the the [sic.] Tongue, and the roots of the Teeth”)によって生じると捉えているが、分類と同様に[s], [z]を「か細い音」(“subtle”)、[f], [ʒ]を「厚みのある音」(“dense”)と捉え、両者を区別している(361, 379)。さらに[f], [ʒ]の調音の際の「息のpercolation」は「凹状にした舌と、上歯と下歯、両歯の間で」(“betwixt the tongue rendered concave, and the teeth both upper and lower”)と行われるのに対し、[z], [s]は「舌と上歯あるいは歯茎が近接して、舌と上歯との間から息を押し出して」(“An appulse of the tongue towards the upper Teeth or Gums, and then forcing out the breath from betwixt the tongue and the upper teeth”)つくられると詳述している(369)。「凹状にした舌」の一節は[f], [ʒ]の調音の際の舌の溝型の形をよく捉えている。

Wilkinsは[s], [z]を“hissing”(「スー音」)

と捉え、[s]は“Sibilus”(「歯擦音」と呼ばれると説明している(369)が、[f], [ʒ]の調音の説明にはこの種の用語は使っていない。

[tʃ], [dʒ]は“Double Consonants”(「二重子音」)とみなされ、Wilkinsが掲げた単音の言語音の分類には見受けられない。彼はこの両破擦音が単音であることを否定し、その理由を「その調音が始まった音と同一の音で終わらない」(“in the prolation of them [[tʃ] and [dʒ]], we do not end with the same sound with which we begin”)からだと説いている。

[tʃ], [dʒ]の音価に関する彼の記述には躊躇を感じる。彼は、[dʒ]の音価を*dzy*(例えば*dzyindzyer*(ModE. *ginger*), *dzyudzy*(*judge*))かあるいは*dy*(例えば*dyoy*(*joy*), *dyentle*(*gentle*), *lodyng*(*lodging*))と、あるいは、[tʃ]を*ty*(例えば*ortyard*(*orchard*), *rityes*(*riches*))と捉えてもよいと考えている。しかし、最終的にはWilkinsは[tʃ], [dʒ]をそれぞれ*T + Sh, D + Zh*と捉えた方が明瞭であると結論を下している(372)。<sup>7</sup>

#### 4.3 William Holderの[f], [ʒ], [tʃ], [dʒ]の分類と記述

William Holder(1616-1698)が*Elements of Speech*(1669)において提唱している言語音の単子音の体系では、潜在的に存在可能な子音がすべて4×9の構造を成す秩序立った枠組みの中に組み入れられていて(62)、この体系はFirth(1946: 115)が指摘したように現代の体系に近い。Holderの体系によると、子音はまず閉鎖の程度によって、plenary(完全な)あるいはocclude(閉鎖された)と呼ばれる閉鎖が完全な子音とpartial(不完全な)あるいはpervious(通過することができる)と呼ばれる閉鎖が不完全な子音に分かれる。



plenaryの範疇は今日の音声学でいう鼻音を含む閉鎖音で構成され、labial（唇音）（口音  $P$  [p],  $B$  [b]; 鼻音  $M'$  [m̥],  $M$  [m]), gingival（歯茎音）（口音  $T$  [t],  $D$  [d]; 鼻音  $N'$  [n̥],  $N$  [n]), palatick（口蓋音）（口音  $K$  [k],  $G$  [g]; 鼻音  $Ng'$  [ŋ̥],  $Ng$  [ŋ]) に3分される。partialの範疇は、labidental（唇歯音）（口音  $F$  [f],  $V$  [v]; その鼻音2音), lingua-dental（舌歯音）（口音  $Th$  [θ],  $Dh$  [ð]; その鼻音2音), gingival-sibilant（歯茎歯擦音）（口音  $S$  [s],  $Z$  [z]; その鼻音2音), palatick-sibilant（口蓋歯擦音）（口音  $Sh$  [ʃ],  $Zh$  [ʒ]; その鼻音2音), gingival-free（歯茎解放音）（口音  $L'$  [l̥],  $L$  [l]; その鼻音2音), gingival-jarring（歯茎不快音）（口音  $R'$  [r̥],  $R$  [r]; その鼻音2音）の6つの範疇に分類される。partialの分類には、能動調音器官と受動調音器官を組み合わせた範疇（labidental, lingua-dental）や受動調音器官と聴覚的な特質を組み合わせた範疇（gingival-sibilant, palatick-sibilant, gingival-jarring）などが設けられているため、範疇名に子音の特性が反映され、子音の分類が細分化されている。したがって、Holderの体系では  $Sh$  [ʃ],  $Zh$  [ʒ] は palatick-sibilant、 $S$  [s],  $Z$  [z] は gingival-sibilant に属することから、両音とも破擦音の特性を有すると考えられるものの、前者2音の調音点を口蓋、後者2音のそれを歯茎と捉えて分類上の区別がなされているため、Wilkinsのように「か細い音」と「厚みのある音」といった範疇を設ける必要がない。

子音はさらに、有声音 (vocal) / 無声音 (spiritual)、口音 (ore-) / 鼻音 (naso-) の基準に基づいて、4つの範疇、つまり、(ore-) spiritual（無声の口音）、(ore-) vocal（有聲の口音）、naso-spiritual（無声の鼻音）、naso-

vocal（有聲の鼻音）のいずれかに分類される (22-74)。  $Sh$  と  $Zh$  はそれぞれ (ore-) spiritual, (ore-) vocal に分類されていることから、口音の無声音と有声音と捉えられている。

Holderはまず  $S$ ,  $Z$  の調音の記述について「舌先と歯茎との部分的な閉鎖がある。それによって息がまっすぐな声道を通り、同時に、舌の両側面が両歯の側面にしっかりとついたままにすると、スー音 (hissing sound) が生じる。」 (“there is a *Partial Pervious Appulse* of the End of the Tongue to the Goums, giving the Breath a streight passage there, by which hissing sound is made; the sides of the Tongue at the same time resting firmly on the side Teeth.”) と説明し (41-42)、続いて  $Sh$ ,  $Zh$  は「舌の両側面を両歯につけて、舌先をもっと下方へ持っていき、舌の中央部を口蓋のもっと近くへと持ち上げると」 (“the end of the Tongue born more downwards, and the middle of it born up nearer the Palate, the sides resting on the Teeth”) つくられると説明している (42)。このHolderの調音の記述においては、[s], [z] と [ʃ], [ʒ] の調音上の相違が適切に捉えられている。

さらに、 $Sh$  の調音の際、息は「 $S$ よりも丸い息の声道」 (“a rounder passage of Breath than  $S$ ”) を通過し、「後者 [ $S$ ] は歯茎にてスーという音を出し (hissing); 前者 [ $Sh$ ] は口蓋のさらに広範囲なところでスーという音を出す」 (“*this* [ $S$ ] hissing in the Goums; *that* [ $Sh$ ], in a larger space, in the Palat”) と説明されている (71)。 $Sh$  と  $S$  はともに「スー音」 (“hissing”) として捉えられ、ここにおいても破擦音の特性を有していると述べられている。 $S$  の調音の場合は摩擦が舌と歯茎の間、 $Sh$  の調音の場合は、口蓋のどの部分か特定

されていないものの、舌と口蓋の広範なところで生じると適切に説明されている。

[tʃ], [dʒ] については、Holderはこの2子音を「二重子音」と捉え、言語音の単音の体系に組み入れず、調音についても記述していない。綴り字 *Ch* によって表される [tʃ], 綴り字 *J* によって表される [dʒ] は、それぞれ *T + Sh, D + Zh*か、あるいは *T + Y, D + Y*の子音連結群と捉えている (72)。<sup>8</sup>

#### 4.4 Christopher Cooperの [f], [z], [tʃ], [dʒ] の分類と記述

Christopher Cooper (d. 1698) が *The English Teacher* (1687) において提唱している英語の単子音の体系は、まず閉鎖の程度を基準に、息が一部遮断されて生じるthe first rank of consonants (閉鎖音以外の子音) と息が完全に遮断されて生じるthe second rank of consonants (閉鎖音 *b, d, g, p, t, c*) の2分割から始まる。次に、前者はsemivowels (半母音) と aspirated (気音) に、後者は semimutes (半黙音) と mutes (黙音) に分かれる。息の放出が多い方(無声音に相当する)を aspirated と mutes、少ない方(有声音に相当する)を semivowels と semimutes としている。[f], [z] をそれぞれ表す子音 *sh, zh* が属するthe first rank of consonantsは鼻音 (*m, hm; n, hn; ng, hng*) と口音に2分され、口音はさらにlabial (*w, hw; v, f*), lingua-dental (*z, s; zh, sh; dh, th*), lingua-palatine (*l, hl; r, hr; y, hy*), guttural (*gh, ch; h*) に4分される (18-21)。*sh, zh* はそれぞれ有声音の範疇 semivowels, 無声音の範疇 aspirated に属する。このように、Cooperの子音体系において *zh* [z] と *sh* [f] は息が一部遮断される音の中のlingua-dental (舌歯音)の有声音と無声音とみなされている。

Cooperはこの *zh* [z] の調音の記述について、「*Zh*は、[*Z* [*z*] と] 同じ位置において、息が [*Z* [*z*] よりも] 高く持ち上げられた舌と口蓋のくぼみの間を、ぴったりと閉じた両歯から [*Z* [*z*] よりも] よりしみ出て、[*Z* [*z*] よりも] より強く粗野に発せられると、つくられる」(“*Zh* is made in the same palace [as *Z*], if the breath is emitted more strongly and grosly between the Tongue raised higher and the hollow of the Palate more strained through the Teeth shut close”) と説明している。一方、*zh*の調音と比較された *Z* [*z*] の調音位置については「*Z* [*z*] は、舌先が下歯の根元に固定されて、その間舌の真ん中が持ち上げられてつくられる。ほぼ閉じられた両歯から息が放出されると、スー音 (hissing) を生じるが、その音はか細い音である。」(“*Z* is framed by the end of the Tongue fixed to the root of the lower Teeth, and the middle in the mean time raised, while the air breath’d through the Teeth almost shut makes a hissing but slender sound”) と説明されている (Cooper 1687: 20)。<sup>9</sup> この *Z* の調音の記述においてふたつ着目すべき点がある。ひとつは、この *Z* は「スー音」(“a hissing . . . sound”) であることである。Cooperの [f], [z] の調音の記述から、彼がこの硬口蓋歯茎破擦音も「スー音」と捉えているとみなしてもよいだろう。もうひとつ着目すべき点は *Z* が「か細い音」(“slender sound”) と捉えられていることである。これに対し、[s], [z] と同様に lingua-dental である [f], [z] は「[*S* [*s*] と *Z* [*z*] よりも] もっと厚めに息を吐き出す」(“Breathed more dense [than *S* and *Z*]”) 音と解釈されている (22)。このCooperの解釈は、Wilkinsが[s], [z]を「か細い音」(“subtle”)、

[ʃ], [ʒ] を「厚い音」（“dense”）と捉えた解釈と一致している。

Cooperが挙げた [ʒ], [ʃ] の例はそれぞれ *F. I* (ModFr. *J*), *F. ch* のみである。

Cooperは [dʒ], [tʃ] を「二重子音」と捉えているため、彼の言語音の単音の分類に組み入れていない。そのためその調音の詳細な記述も見受けられないが、*judge* の *j* は *dzh* と、ギリシア語の派生語以外の語に見受けられる *such, rich* の *ch* を *tsh* と記している (23-24, 62-64)。

#### 4.5 Francis Lodwick の [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の分類と記述

Francis Lodwick (1619-94) が “An Essay towards an Universal Alphabet” (1686) にて言語音の単子音の分類を以下の 6 × 11 の表で提示している。横 1 列目を Primitives、横 2 列目から下を Derivatives と名づけている (130)。縦の列は 1 列目から 5 列目までは調音点によって順に両唇音、歯音あるいは歯茎音、硬口蓋歯茎音、軟口蓋音、唇歯音が置かれている。横の列は縦 1 列目から 6 列目に限れば、1 列目から有声閉鎖音、無声閉鎖音、鼻音、有声摩擦音、無声摩擦音が並べられている。

調音については記述していないものの、Lodwickが [ʃ], [ʒ] のみならず [tʃ], [dʒ]

も単子音の体系に組み入れ、さらにその体系の中で同一の調音点に分類しているのは注目値する。彼は *th, ch, sh, gn, ng* などの子音を「複合的な音」（“compounded”）と捉える通俗的な解釈を斥け、表に提示した子音がすべて単音であると明言している。仮に複合的な音と解釈した場合、その音を構成している複数の単音を構成している順に発音してもそれらの子音が作り出せないからだという (131)。この単音を支持する彼の説明は適切である。調音法については、[ʃ], [ʒ] は摩擦音の位置、[tʃ], [dʒ] は閉鎖音の位置に適切に配置されている。[tʃ], [dʒ] を子音の体系に組み入れることができたのは、この破擦音を閉鎖音の特性から捉えることができたからであろう。破擦音は、調音の際、摩擦が生じるまでは閉鎖に続いて破裂が生じることから、閉鎖音と分類しても差支えない (Dobson 1968: 275)。*[ʒ]* については、*F. Jean* の例を挙げただけである (Dobson 1968: 1, 278)。

## 5. 結論

17世紀の音声学者が彼らの科学的考察によって試みた [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の分類と記述は、彼らの考察の基準となる古典語文法家の分類に見受けられなかったせいも、その他の言語音と比較すると未熟だと言えよう。この4硬口蓋歯茎音、特に [tʃ], [dʒ] は「二

表 1 Lodwickが考案している単音の子音の表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1	<i>B</i> [b]	<i>D</i> [d]	<i>J</i> [dʒ]	<i>G</i> [g]	=	=	<i>L</i> [l]	<i>H</i> [h]	<i>Y</i> [j]	<i>R</i> [r]	<i>W</i> [w]
2	<i>P</i> [p]	<i>T</i> [t]	<i>Ch</i> [tʃ]	<i>K</i> [k]	=	=					
3	<i>M</i> [m]	<i>N</i> [n]	<i>gn</i> [ɲ]	<i>ng</i> [ŋ]	=	=					
4	=	<i>dh</i> [ð]	<i>J</i> [ʒ]	<i>g</i> [ʁ]	<i>V</i> [v]	<i>Z</i> [z]	<i>lh</i> [ʎ]				
5	=	<i>th</i> [θ]	<i>sh</i> [ʃ]	<i>ch</i> [x]	<i>F</i> [f]	<i>S</i> [s]					
6		<i>n</i> *									

\*Lodwickによると、*F. danse* の *n* の音である。

重子音」と解釈する者が見受けられた。16世紀には、古典語の言語観に影響を受けている綴り字改革者と文法家が多い中で、Hartは/z/を除いた3硬口蓋歯茎音を適切に単音と捉えて、彼独自の単子音の体系に組み入れている。その調音の記述も当時の基準から判断すると群を抜いて詳細で精緻であった。特に、[tʃ],[dʒ]の調音における閉鎖音としての閉鎖と開放の過程に関する記述は、本稿で考察した17世紀の音声学者の中には見受けられなかった。

本稿で考察した17世紀の音声学者の中で、[f],[ʒ],[tʃ],[dʒ]をすべて単音として適切に単子音の体系に組み入れているものはLodwickだけであった。彼の分類には調音の説明を加えていないため曖昧な点も多いが、彼の提示した言語音の体系は優れた洞察力を示している。この4子音を、歯音や歯茎音が属す範疇とは異なった硬口蓋歯茎音が属す範疇に分類し、さらに調音法の観点から[f],[ʒ]を摩擦音が属す範疇、[tʃ],[dʒ]を閉鎖音が属す範疇に分類している。Hartと同様に[tʃ],[dʒ]を閉鎖音と解釈したからこそこの子音を単音として容易に分類できたのだろう。破擦音が属す範疇は単独で彼の体系には設けられていない。

他の学者は[tʃ],[dʒ]を「二重子音」と捉えているため、単子音の体系に組み入れておらず、その調音の記述も見受けられない。特にHolderとCooperのこの2硬口蓋歯茎破擦音に関する説明は乏しい。彼らの判断している2子音の音価は一貫しておらず、その解釈には躊躇も感じられる。Wallisは*ty* [tʃ], *dy* [dʒ], WilkinsとCooperは*t + sh* [tʃ], *d + zh* [dʒ]と解釈する一方で、Holderはこの二つの解釈を紹介するだけで最終的な解釈を保留

し、Wilkinsは他の解釈を積極的に否定してはいない。Wallisの*ty*, *dy*については後述する。もうひとつの表記*t + sh*, *d + zh*については、彼らの調音の説明が乏しく、これ以上議論を進めると推論の域を出ないことは否めないであろう。彼らがこの子音を「二重子音」と捉えたのは、綴り字の影響を受けたからなのか、それとも破擦音の彼ら自身の科学的な考察からふたつの音素の連続と捉えたのか、決定的な証拠は提示されていないと言えよう。<sup>10</sup>少なくとも本稿で考察した17世紀の音声学者の中には、破擦音の調音における閉鎖直後の摩擦について記しているものは見受けられなかった。しかし、上述したように、Wilkinsがこの両破擦音を「二重子音」と捉えた理由を述べた一節、つまり「その調音を始めた音と同一の音で終わらない」からだと説いている一節は、破擦音の特性を示唆している。

[f],[ʒ]については、Wallis以外の学者は単音と解釈しているため、その音価の記述は詳細である。Wallisは[tʃ],[dʒ]と同様に第2要素をyとして*sy* [sʃ], *zy* [zʒ]と捉えているが、その他の学者は単音として子音の体系に組み入れている。彼らが[f],[ʒ]を摩擦音と解釈していることは、この2子音の調音の説明に用いられた用語Wilkinsの*percolation*（浸透）、Holderの*partial appluse*（不完全な閉鎖）、Cooperの*the first rank of consonants*（息が一部閉鎖されて生じる子音）から見て取れる。しかし、両子音の調音点を特定するのは初期近代英語期の学者には簡単ではなかった。Holderは[s],[z]の調音点を「歯茎」（“gingival”）、[f],[ʒ]の調音点を「口蓋」（“palatick”）と捉えて調音点を区別し、さらに、[f]の摩擦は、舌と、[s]よりも広範囲な、口蓋の一部との間で生じると適切に詳述して

いる。しかしながら、WilkinsとCooperは [ʃ], [ʒ] の調音点を [s], [z] とともに歯茎と解釈し、それ故に両音を弁別するために [s], [z] を「か細い音」（“subtle,” “slender”）、[ʃ], [ʒ] を「厚みのある音」（“dense”）と捉える必要があった。

このWilkinsとCooperの両音の解釈は、当時多大な影響を及ぼしたWallisの子音の分類によるものであろう。Wallisは単子音の体系にて、子音 *F* [f], *V* [v], *S* [s], *Z* [z], *Ch* [x], *Gh* [ɣ] を “subtiliores” あるいは “tenuiores”（「か細い音」）、子音 *F* [ɸ], *W* [w], *Th* [θ], *Dh* [ð], *H* [h], *Y* [j] を “crassiores” あるいは “pinguires”（「深みのある音」、厚みのある音）と名づけ両者を区別している。彼の説明によると、前者は息が「横長の裂け目から」（“per rimulam oblongam”）吐き出されるのに対し、後者は息が「丸い穴のようなものから」（“per rotundum quasi foramen”）吐き出される（18）。Wallisは [ʃ], [ʒ] を「複合的な」音と捉えているため両音はこの単子音の分類とは無関係だが、[s], [z], [ʃ], [ʒ] が同一の調音点を有していると考えられるWilkinsとCooperには、[s], [z] と [ʃ], [ʒ] を弁別する必要があった。そこでWallisが [s] - [θ], [z] - [ð] を「か細い音」-「厚みのある音」の組み合わせと考えるように、[s] - [ʃ], [z] - [ʒ] も同様の組み合わせと解釈したに違いない。上述したように、Holderは *Sh* の調音について息が「*S*よりも丸い息の声道」（“a rounder passage of Breath than *S* [*S*]”）を通過すると述べているが、この一節もWallisのpinguiresの特性と一致している。

歯擦音の特性については、Holderは [s], [z], [ʃ], [ʒ] のすべてに認めているが、WilkinsとCooperは [s], [z] にしか記してい

ない。

Wallisは [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の音価を *sy* [sj], *zy* [zj], *ty* [tj], *dy* [dj] と明言している。彼がこのように判断した理由をLehnertは、Wallisが過度な体系化を追求した結果だと結論づけている（79-83）。Kemp（1972: lx）も認めているように、Wallisは「複合的な文字[音]」においても体系化を追求し、二重母音 (*ay*, *ey*, *aw*, *ew*など) が「母音+*y*, *w*」であるのと同様に、子音連結群と捉えているこれらの硬口蓋歯茎音 (*sy*, *zy*, *ty*, *dy*) も「子音+*y*」という同一の構造にしたというのである。しかしながら、Wallisがこのように考えたのは、言語音に関する理論からではなく、彼自身が自分の耳で実際にこの音を聴いて確認したからであるということも考慮する必要がある。Kemp（1972: lx）が推論しているように、この音を彼が当時実際に耳にしたと考えると、彼の考察に影響を与えたのは、上述したModE. *nation*, *nature*, *orchard* のような語に見られた当時の子音推移 [sj] > [ʃ], [zj] > [ʒ], [tj] > [tʃ], [dj] > [dʒ] であっただろう。上述したように、当時この変化の結果生じた音以外に少なくとも [ʃ], [tʃ], [dʒ] は既に英語には存在していたが、Wallisはこの子音推移とは無関係の、つまりこの推移以前から英語に存在していたすべての [ʃ], [tʃ], [dʒ] にまでこの推移を誤って適用したのではなからうか。Horn-Lehnertは、当時 [sj] > [ʃ], [zj] > [ʒ] の推移が起こっていたとしても、この推移が起こっていることを記さずに [sj], [zj] を固持している学者が少なからず見受けられることを指摘し、その理由として、綴り字の影響があったことと、当時の標準語話者の中にはこの推移が生じてからも推移以前の音を長い間固持していた可能性があることを指摘

している (2: 1082)。このような姿勢をとったのはおそらく発音に慎重な、保守層の者だったに違いない。Wallisは発音の推移に慎重で、この推移前の音を支持したのではなからうか。

Lodwickの [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] の分類、Holderのこの4硬口蓋歯茎音に関する記述は言語音の優れた分析力を示しているが、概して17世紀の音声学者が彼らの科学的考察によって試みたこの4硬口蓋歯茎音、特に [tʃ], [dʒ] の分類と記述には一貫性がなく、彼らの分析と記述には稚拙で、混乱を示すことも少なくない。これは彼らが古典語文法家の解釈を頼ることなく、彼ら自身の考察力に基づいてこの4硬口蓋歯茎音の科学的な分析を試みようとする中で、まだ彼らの4硬口蓋歯茎音の分析が未熟だったことを示している。この捉え難い [ʃ], [ʒ], [tʃ], [dʒ] を科学的な方法論によって分析しようとする彼らの試みとともに、彼らが直面した試練が確固として感じ取られるのである。

## 注

1. 最新の国際音声記号の表では [ʃ], [ʒ] は「後部歯茎音」(“postalveolar”) という名称を与えられているが、本稿では、Cruttenden (2014: 236 Notes 28) と同様に、硬口蓋化された歯茎音の調音を明示する「硬口蓋歯茎音」(“palato-alveolar”) の名称を用いる。[tʃ], [dʒ] にも同様の名称を用いる。
2. 古典語の文法家の音声に関してはKemp (1972: 1; 2006: 470) を参照した。
3. Danielsson-Gabrielsson (1972: 199. 1章の注1) 参照。Gillは1章では/dʒ/を *dzyason* (*Jason*) のように *dzy* と表す正音学者もいると述べている (2)。なお、本稿で用いる「二重子音」という用語は当

- 時の用語の直訳であり、現代の専門用語ではない。
4. Thomas Smithの詳細については、Salmon (1998: 139-40) 参照。
  5. John Hartの /f/, /z/, /tʃ/, /dʒ/ については、Danielsson (1955: 221-22) 参照。なお、本稿のJohn Hartからの引用文は現代英語の文字に改めている。
  6. 本稿で使用するWallisのテキストは6版 (1765) である。この版はWallis自身が担当した最後の版、5版と本質的に同じである (Kemp 1972: lxxiii)。
  7. Wilkinsは余白に [dʒ] の音価を *dzy* と解釈した者の例としてGill、*dy* と解釈した者の例としてWallisの名前を記しているように思えるが、Gill自身の解釈は上述したようにWilkinsの最終的な解釈と同じである。Gillはただ *dzy* と解釈する者もいると紹介しただけである。歯茎破擦音 [dʒ], [ts] に対してWilkinsはそれぞれ *DS*, *TS* と表記するだけにとどまっている (372)。言語音の分類に組み入れることもなく、その調音の説明もしていない。
  8. 歯茎破擦音 [dʒ], [ts] に対して、Holderは *It. Ds, Ts* の表記を挙げている (140)。言語の分類に組み入れることもなく、その調音の説明もしていない。
  9. 歯茎破擦音については、Cooperはドイツ語 *Z* に対して *ts* の音声表記を与えている (20, 23)。彼はこの *ts* [ts] を [z], [s] と同じLingua-dentalに分類している (20)。調音に関する説明は見受けられない。
  10. 破擦音 [tʃ], [dʒ] には、そもそもこの複合的な音を単一の音素と解釈するか、それともふたつの音素の連続、つまり閉鎖音 + 摩擦音 ([t] + [ʃ], [d] + [ʒ]) と解釈するかという問題もある (Cruttenden 2014: 186-88) が、本稿では17世紀の音声学者のこの音の記述を斟酌すると、その域までの議論には至らないであろう。

## 参考文献

- Allen, W. S. 1978. *Vox Latina*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Allen, W. S. 1981. “The Greek Contribution to the History of Phonetics.” In R. E. Asher and

- Eugénie J. A. Henderson. (eds.) *Towards a History of Phonetics*. Edinburgh, Edinburgh University Press, 115-22.
- Allen, W. S. 1987. *Vox Graeca*. 3rd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cooper, Christopher. 1687. *The English Teacher*. English Linguistics 1500-1800. 175. Menston: Scolar Press, 1969.
- Cruttenden, Alan. 2014. *Gimson's Pronunciation of English*. 8th ed. New York: Routledge.
- Danielsson, Bror. 1955-1963. *John Hart's Works on English Orthography and Pronunciation [1551, 1569, 1570]*. Part I & II. Stockholm Studies in English. V & XI. Uppsala: Almqvist and Wiskell.
- Danielsson, Bror and Arvid Gabrielson. 1972. *Alexander Gill's Logonomia Anglica (1619)*. Part II. Stockholm Studies in English. XXVII. Uppsala: Almqvist and Wiskell.
- Dobson, E. J. 1985. *English Pronunciation 1500-1700*. 2nd ed. 2 vols. Oxford: Clarendon Press.
- Firth, J. R. 1946. "The English School of Phonetics." *Transactions of the Philological Society*. 92-132.
- Gill, Alexander. 1621. *Logonomia Anglica*. English Linguistics 1500-1800. 68. Menston: Scolar Press, 1968.
- Hart, John. 1569. *An Orthographie*. Danielsson 1955: Part I. 165-228.
- Holder, William. 1669. *Elements of Speech*. English Linguistics 1500-1800. 49. Menston: Scolar Press, 1967.
- Horn, Wilhelm and Martin Lehnert. 1954. *Laut und Leben*. 2 vols. Berlin: Deutscher Verlag der wissenschaften.
- Keil, H. (ed.) 1855-80. *Grammatici latini*. 8 vols. Lipsia: Teubner.
- Kemp, J. A. 1972. *John Wallis: Grammar of the English Language with an Introductory Grammatico-Physical Treatise on Speech (or on the Formation of All Speech Sounds): A New Edition with Translation and Commentary*. London: Longman.
- Kemp, J. A. 2006. "Phonetics: Precursors of Modern Approaches." In Brown, Keith et al. (eds.) *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. 2nd ed. Oxford: Elsevier, 9, 470-489.
- Lehnert, Martin. 1936. *Die Grammatik des englischen Sprachmeisters John Wallis (1616-1703)*. Sprach und Kultur der germanischen Völker. A. Englische Reiche. Bd. 21. Breslau: Verlag Priebatsch's Buchhandlung.
- Mulcaster, Richard. 1582. *The First Part of the Elementary*. Menston: Scolar Press, 1970.
- Robins, R. H. 1997. *A Short History of Linguistics*. 4th ed. New York: Longman.
- Salmon, Vivian. 1998. 'Some Reflecons of Dionysius Thrax's "Phonetics" in Sixteenth-Century English Scholarship.' *Dionysius Thrax and the Technē Grammatikē*. 2nd ed. Vivien Law, Ineke Sluiter eds. Münster: Nodus Publication, 135-50.
- Smith, Thomas. 1968. *De recta et emendate linguae anglicae scriptione, dialogus* in Bror Danielsson, ed. *Sir Thomas Smith: Literary and Linguistic Works [1542 · 1549 · 1568]*. Part III. Stockholm Studies in English LVI. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Wallis, John. 1765. *Grammatica linguae anglicanae*. 6th ed. London: G. Bowyer.
- Wilkins, John. 1668. *An Essay towards a Real Character, and a Philosophical Language*.